1 | ミルグラム監獄内 エスの部屋

薄暗いエスの部屋。

深く椅子に座っているエスと、その膝の上に乗っているジャッカロープ。

ジャッカ 「わかったな……お、そろそろ囚人どもが気づく時間だな。準備はできてるな？」

ジャッカ 「ミルグラム第1審開始だ」

ジャッカ 「……ってな。さぁ、行くぞエス」

ぴょんとエスの膝から飛び降りるぽふっと間抜けな足音。

エス 「……どこへ？」

まだ少しうつろなエス。

ジャッカ 「『パノプティコン』。囚人共の部屋を一望できる場所だ」

エス 「パノプティコン……」

ジャッカ 「記憶が曖昧なんだろ？道案内がてら色々説明してやるよ」

エス 「あぁ、頭に霞がかかっているようだ。……すまない」

ジャッカ 「良いってことよ。いつもそうなんだ」

エス 「……？大丈夫だ。仕事に支障はない」

ジャッカ 「オッケー。じゃあいくぜ」

エス 「あぁ」

顎でドアの方を示すジャッカロープ。

ジャッカ 「……ん」

エス 「……どうした？」

更に顎でドアの方を示すジャッカロープ。

ジャッカ 「……ん！！」

エス 「撫でればいいのか？」

ジャッカ 「チゲぇよ！開けろよドア！見りゃあわかんだろ！」

気づき納得するエス。

エス 「あぁ……」

ドアに手をかけるも途中で止まるエス。

エス 「疑問なんだが……ひとりでドアも開けられないのになんでそんなに偉そうなんだ？」

ジャッカ 「うるっせぇなぁ。開けられないのはオマエの寝室だけだ。他の部屋は俺様用の小さい入口があんだよ……誰が小さいんだコラァ！」

エス 「僕は何も言ってない」

エスがドアを開ける音。

2 | ミルグラム監獄内 通路 エスの部屋前

通路に出た2人。

長くて暗い通路が続いている。

エス 「……長い通路だな」

ジャッカ 「ここ、お前の寝室が通路の端っこだ。この通路を挟むようにしていろんな部屋と施設があるわけ。全部説明してたキリがねぇから、今日ははぶくけどな」

真正面の小さな扉を見て問うエス。

エス 「僕の部屋の向かいは何だ？」

ジャッカ 「俺様の部屋だな。許可なく入んじゃねぇぞぉ」

エス 「予定はないから大丈夫。それに、見たところ人間が通れる大きさの扉がない」

ジャッカ 「ふん、それもそうだ」

通路を歩き始める2人。

コツコツとエスの足音が響く中会話をする。

3 | ミルグラム監獄内 通路

先を行くジャッカロープが部屋を紹介していく。あるきながら会話。

ジャッカ 「ここが囚人用のシャワー室。向かい側が倉庫。必要な備品はたいていココ」

エス 「囚人用……この通路は囚人も出入りするんだな」

ジャッカ 「あぁ。通行を許可する時間やら、シャワーを男女別にするかどうかやら細かい生活のルールはオマエが後で決めりゃあいい」

エス 「僕が決めるのか？」

ジャッカ 「おう、このミルグラムをどう管理・運営していくかオマエに全部任せてる。地獄にするも天国にするもオマエ次第よ」

ジャッカロープの言葉に何の気無しにうなずくエス。

エス 「……わかった」

ジャッカ 「なんでか？とは聞かねぇんだな」

エス 「そういうものなんだろう。僕にはこの監獄を管理する義務ある。不完全な記憶の中でも、それだけは覚えている」

その言葉に満足そうに微笑むジャッカロープ。

ジャッカ 「......上出来だ」

エス 「……なぁ、ジャッカロープ」

ジャッカ 「あんだよ」

エス 「……もっと早く歩いてくれないと踏んでしまう」

ジャッカ 「体のサイズ考えろ！人間様がウサギに合わせろや！！！……誰がウサギだコラァ！！」

エス 「僕は何も言っていない」

ジャッカ 「ったくよぉ……。あ、ここが食堂な」

エス 「……そういえば誰が食事を用意するんだ？ここに僕とお前以外に管理人がいるのか？」

ジャッカ 「オレ様が作ってんだよ」

エス 「なるほど。……ん？なるほど？」

予想外の答えに若干うろたえるエス。

ジャッカ 「実はオレ様はこの監獄の料理長でもある。和・洋・中なんでもござれさ」

エス 「……ちょっとした疑問なんだがその手でフライパンやら、包丁やら持てるのか？」

ジャッカ 「ぐっっと気合を入れたら持てる」

エス 「持てるのか……。その、毛とか入らないのか」

ジャッカ 「毛の生え変わり時期はすごく入る」

エス 「すごく入るのか……」

話している間に通路の突き当り、大きな扉の前にたどり着いている。

ジャッカ 「おら、馬鹿言ってる間についたぞ。その扉を開ければ、ミルグラムの中心部パノプティコンだ」

扉を開けるエス。ギギギと重い扉が開く音。

4 | ミルグラム監獄内 パノプティコン

円形のホールのような空間。

等間隔で扉が存在している。

エス 「これがパノプティコン。ドーム状になっているんだな」

ジャッカ 「おう。今オレ様たちはこの丸い部屋の北側、22時の位置にある扉から入ってきたことになる」

エス 「それぞれの扉が囚人の部屋か？」

ジャッカ 「そういうこった。この部屋を時計に見立てると、囚人番号と時刻が一致してるってわけよ。覚えやすくていいだろ？」

エス 「なるほどね」

壁にかかっている時計をチラッと見やるジャッカロープ。

ジャッカ 「ふむ。まだもうちょっと時間があるな。軽く囚人どもの紹介をしといてやるよ。つってもオレ様もツラしか見てねぇんだけどな」

こつこつと円形の部屋を時計回りに一周しはじめるエスとジャッカロープ

1時の部屋で足を止める二人。

ジャッカ 「まず、1時の位置の部屋。囚人番号1番サクライハルカ。ややこしい名前だが、男だ」

エス 「サクライ……ハルカ……」

ジャッカ 「根暗そうな顔してやがったな。ま、うまいこと心開かせて色々聞き出してくれや」

エス 「ただ、その顔すら本当かはわからないのだろう？」

ジャッカ 「フン、よくわかってんじゃねぇか。オレ様たちをあざむく擬態かもしれねぇ。ニンゲンは嘘をつく生き物だからな」

エス 「……覚えておく」

歩きはじめる2人。

2時の部屋の位置に。

ジャッカ 「次、2時の位置。囚人番号2番カシキユノ。若い女だった。高校生くらいじゃねぇかな」

エス 「高校生くらい？囚人の年齢もわからないのか？」

ジャッカ 「囚人のパーソナルなところに興味ねぇからな、オレ様。看守のオマエが把握しとけばいい

3時の部屋。

ジャッカ 「次、3時の位置。囚人番号3番カジヤマフウタ。てアホそうな男だ。オレ様こいつ嫌い」

エス 「……顔を見ただけなんだろう？」

ジャッカ 「ニンゲン、第一印象が9割だよ。俺様に投票権があったら迷わず有罪にしてるね」

エス 「そういうものかな」

4時の部屋。

扉に刻まれている文字を読むエス。

エス 「囚人番号4番はクスノキ、ムウ？女性か？」

ジャッカ 「おう。やたら美人の姉ちゃんだ。逆にこっちは無罪にするな。美しい遺伝子は残すべきだ」

足を止めるエス。

エス 「はぁ……。そんな欲にまみれた判断基準でいいのか？」

ジャッカ 「へっ......じゃあ何を判断基準にするんだ？ただ法律に照らして裁くんだったらオマエである意味がない」

エス 「む……」

ジャッカ 「言ったろ、オマエ自身の基準で決めればいいって。それが性や愛でも文句は言わねぇよ。監獄内恋愛を禁止しやぁしねぇからよぉ」

いやらしくニヤつくジャッカロープ。

それを見て少し口をとがらせるエス。

エス 「……くだらないな。次は？」

ジャッカロープを置いて歩きはじめるエス。

追いかけるように歩くジャッカロープ。

ジャッカ 「へっ。今回の看守さんはウブだこと。囚人番号5番、キリサキシドウ。歳は三十くらいかな。こいつはオレ様に負けず劣らずの男前だな。......色恋目線でいくと、こういう奴が集団に波乱を巻き起こしたりするんだよなぁ」

エス 「…… (ため息)」

ジャッカロープを無視して歩き6時の位置に。

エス 「真南6時の位置。これで半分か」

ジャッカ 「ここは囚人番号6番、シイナマヒル。20代前半ってとこかな。……オレ様的にはこれくらいの女が一番好みだな」

下世話なジャッカロープにイラつき、足を止めるエス。

エス 「ジャッカロープ。遊びじゃないんだろ、この仕事は」

ジャッカ 「くっくっ…...遊びのつもりはねぇよ。この仕事の本質

は人間を見ることだ。オマエにもいずれわかる」

エス 「……ふん」

釈然としない様子のエス。歩きはじめる。

ジャッカ 「囚人番号7番。ムクハラカズイ。おっさんだ。今回の最年長じゃねぇかな。体格的にも、戦闘になったらこいつがナンバーワンだろうな」

エス 「……そうだ。囚人に襲われたらどうする？その、あまたらどうする？その、あまり言いたくはないが、僕の体格で抵抗できるとは思えない」

足を止め、後半少し恥ずかしげに言いよどむエス。

ジャッカ 「安心しな。囚人どもはオレ様たち管理者への攻撃はできない。そういう仕組みになってる」

エス 「『管理者へ』つまり囚人同士はそうではないと」

ジャッカ 「ふん、冴えてるじゃないか。そういうこともあるかもしれない。お前の判決次第じゃな」

歩きはじめ、8時の部屋。

ジャッカ 「さ、次は囚人番号8番モモセアマネ。聞いて驚け。なんとランドセル背負った女子小学生だ」

エス 「そんな小さな子まで…… "ヒトゴロシ" だというのか」

ジャッカ 「くっくっく、知らねぇけどよ。幼ければ純粋で、無垢で、善良で、ってのもまた思い込みなんだろうぜ。だからこそ……」

エス 「だからこそ」

ジャッカロープの説教をさえぎるように言葉をかぶせるエス。

エス 「それを見極めるのが看守の役目だというのだろう。まるで保護者だな、ジャッカロープ」

ジャッカ 「へぇへぇ。わかってんなら、構わねぇよ」

9時の部屋の位置。

ジャッカ 「次、囚人番号9番。カヤノミコト。男だ。特に特徴がなくて言うことねぇな。量産型ってかんじ」

エス 「逆に気になる」

ぼそりと小声でつぶやくエス。

10時の部屋の位置で足を止めるジャッカロープ。

ジャッカ 「最後が囚人番号10番、ユズリハコトコ。こいつは要注意だな。見るからに只者じゃなさそうな女だった」

エス 「これで10人か」

ジャッカ 「これで囚人紹介は終わりだな。ま。あとは実際話して確かめろよ」

なにかに気づいたエス。

エス 「ジャッカロープ」

ジャッカ 「ん？」

エス 「あそこは？11時の位置。あの部屋には囚人はいないのか？」

11時の部屋に歩いていくエス。

ついていかないジャッカロープ。

エス 「他の部屋の扉よりも古いな錆びついている……外側からの錠もない」

ジャッカ 「あぁ、そこはいい。何もない」

感情の乗らない返しをするそっけないジャッカロープ。

エス 「……それは」

エスの声を遮るようにゴーンと鐘のなる音。

パノプティコンの中に強く反響する。

エス 「何の音だ……」

ジャッカ 「時間だな。囚人共が目覚めるぞ。ついに顔合わせってわけだ」

うろたえるエスに向き直り、真剣なトーンで話すジャッカロープ。

ジャッカ 「いいか、オマエ自身が持つ不安や戸惑いや疑問はすべて殺せ。お前は看守なんだ。おそれるな。囚人共にとっての権威と恐怖であれ」

エス 「……言われるまでもないよ。ジャッカロープ。業はミルグラムの看守だ。僕にはそれしかない」

ジャッカロープに背を向けるエス。

エス 「それに、実は今少しだけ楽しみなんだ。ここに集められた囚人たちと出会うのが。そして彼らの罪を知るのが」

ジャッカ 「……」

エス 「お前の言う通り、僕は僕の意思で彼らの罪を暴こう。僕はどう感じるんだろう。赦したい、赦したくない、どう思うんだろう」

自分の掌を見つめるエス。

エス 「僕は、彼らを通して、僕自身のことも知りたいんだ」

ジャッカ 「……エス」

エスの背中を見つめていたジャッカロープ。

顔を下げ、冷めた声色でつぶやく。

ジャッカ 「哀れなことだ」

突如ガシャンガシャンと囚人の部屋の錠が次々に開いていく。

ジャッカ 「……来るぞ。ぶちかましてやんな」

エス 「あぁ。看守としての初仕事といこう」

それぞれのドアが開き、囚人たちがパノプティコンへ踏み込んでくる。

囚人たちの足音が響く。

エス 「ごきげんよう、囚人諸君。僕の名前はエス。この監獄の看守をしている」

エス 「ここは監獄ミルグラム。お前たち10人の罪を裁くために存在する」

エス 「僕がお前達について知っていることは少ない。知っているのは、お前たち全員『ヒトゴロシ』だということだけ」